

Unrivaled Brazzier

ブラスザー

朝日を浴びて熱くなれ

本城あお

## まえがき

いつの時代も、発明発見は文明をもたらし、人々の生活を潤した。

しかし、ダイナマイトや原子力などのように、発明者の意図に反して戦争に使われたり、また使用による事故で多くの犠牲を出すことにつながる科学的発見もあった。

この話に登場する中村忠史は、原子力以上に危険なものを発明した。

それは地球を一瞬のうちに破壊するほど危険なものだが、一方で人間の生活には大変便利なものでもある。

この話は、この危険な発明品が元で起きた事件を巡る、中村忠史の苦悩と仲間たちとの絆を描いた冒険ファンタジーである。

ブラスザー 朝日を浴びて熱くなれ

contents

まえがき 3

1 誘拐事件発生 7

2 怪物出現 14

3 ヒーロー出現 18

4 ヒーローとの出会い 28

5 ネットオークション 36

6 逃亡者との出会い 38

7 怪物の再来 44

8 ミニブラスザーの誕生 51

9 特訓と馳走 57

10	国際協力と徳永	70
11	初めての出撃	83
12	島へ逃走	94
13	友情と愛情	98
14	島にて	100
15	新しい武器	105
16	人質	110
17	裏切り	121
18	気力	129
19	ウイルス	137
20	ドクター山本	142
21	勝負	147
22	アズム・ハンサー	154

あとがき

167

# 1

## 誘拐事件発生

その誘拐事件が起きたのは、11月のよく晴れた日の朝であった。この後に起きる大事件の前兆と知っていたら、私は担当を外してもらっていたことだろう。

私が、署に出勤し、いつものようにお茶を淹れていると、大橋課長が通りすがりに肩をポンと叩く。

「佐藤さん、誘拐事件だねー。今、子供が行方不明になったと電話があったそうだよ」  
どう見てもニヤニヤしている。久しぶりの事件に、私が喜ぶとでも思っているのだろうか、不謹慎なやつだ。

「『白い粉事件』があったばかりで、またですか？」

先週、郵便封筒に白い粉が入っていて『ウイルスだ』という騒ぎがあったが、単なる小麦粉だったから事件にはならなかった。それも、私に後始末を押し付けておいて、もう忘れたのか。

「犯人から連絡はないが、たぶん、今度は本物だよ。マスコミに注意した方がいいね」  
大橋課長が、わざと大声で言う。

私は、また騒ぎ立てて徒労に終わるだろうと思った。折角淹れたお茶も飲まずに、重い腰を上げて、大橋課長の席へ行った。

私の名前は、佐藤幸一、定年間近の刑事だ。この歳で昇進を狙うわけでもなく、ただ、二人の子供と妻を養えればそれでもいいと思っている。結婚が遅かったので孫のような年齢の子供が私の生き甲斐でもある。長女は中学生で私の良き理解者である。夫婦喧嘩をすれば必ず私の味方で、ちよつと頼もしい存在だ。長男は、小学校5年生で、小学校低学年かと思うほど背丈が低く、精神的にもまだ幼い。甘やかしすぎたのかも知れない。

職場には、年下の大橋課長がいる。犯人像や事件の真相に対し、鼻が利くというだけで私を置いているらしく、どこの部署へも異動させないでいる。私にとってはちよつどいい上長かも知れない。

一戸建ての小さな庭付きを購入したのが10年前で、まだ借金が残っていた。辞めるわけにもいかず、盗難の調査やひき逃げの聞き込みなど、毎日がつまらない仕事であったが、仕事とはこんなものと割り切っていた。

行方不明になったのは、秋月幸喜君、小学校5年生だ。昨夜、一人で帰宅すると言って塾を出てから行方が分からなくなっていた。家族は、用水路に落ちたか交通事故という最悪の

事態も考えている。しかし、それよりも身代金目的の誘拐であってほしいらしい。なにより生きていてほしいのだ。私もその考え方には賛成である。

事件は事故と誘拐の両面から、手分けして捜索することになった。

私は、電話の逆探知機器などは、犯人から連絡があつてから用意すれば良いと、単独で秋月幸喜君の両親と家で連絡を待つことにした。

「昨日は、幸喜君の様子に変わったことはありませんでしたか」

私が両親に質問した。それによると、普段と変わらなかったという。いつもは塾まで両親のどちらかが迎えに行くのだが、昨夜は両親共に仕事で帰りが遅かったため、迎えに行けなかった。こんなことは、一度や二度のことでもなかったもので、大丈夫だと思つたらしい。

「携帯を持っているはずなんですが、全然つながらないんです。携帯で居場所が分かると聞いたんですが」

母親が言う。携帯電話の電源を切つても場所が特定できるはずなので、携帯電話会社に問い合わせたが、地下室など電波が届かない場所にあるらしく、まったく分からないという。



「お前が迎えに行けば、こんなことにはならなかったんだ。仕事だからって。単なる飲み会だろ」

どうも夫婦喧嘩が絶えない家庭のようだ。幸喜君の立場なら、両親に手間を取らせて夫婦喧嘩になるより、『一人でも帰れるから大丈夫だよ』と言いたくもなるかも知れない。

「太陽光発電ですね」

私が話に割り込んだ。リビングの壁にカラフルな液晶モニターがあり、太陽光発電の発電量が一目で分かる。太陽光発電に興味はないが、犬も食わない夫婦喧嘩に付き合いたくないからだ。

「ええ、この家、あ、この団地すべてが、オール電化が売りで」

父親が話す。自宅で太陽光発電を行い、ガスや石油を使わないオール電化にすることによって、地球温暖化の防止に一役買っているということか。

「うちにもセールスマンが来て太陽光発電とオール電化を勧めるんですが、なかなか決められなくてね。太陽光発電で余った電力を売っても、もとを取るのには20年くらいかかるらしいですね」

「そうですね。前の買取り金額だと30年以上かかる計算でしたが、今の買取り金額だと20年くらいでしょうか。そんなことより、刑事さん、私たちはどうすればいいんですか」

「犯人からの連絡を待つしかないですね」

あるいは、所轄で進めている搜索結果を待つのだが、そちらの方は期待したくない。

「佐藤さん、犯人からの電話はまだですか」

大橋課長から、携帯電話が何度も鳴る。

「ええ、まったくないので、事故かも知れませんね。早く何か分かればいいんですがね……」

交通事故の目撃の聞き込みや用水路などの搜索を数人にさせているが、搜索の範囲があまり広くなならないうちに応援を求めるか、課長ははかりかねていた。

「佐藤さんは、鼻が利くから、もう何か臭ってきたんじゃないか」

「私の勘でいいのなら言いますけど……家出でしょう。明日には戻りますよ」

秋月幸喜君の両親は、親族も含めて特に大金持ちというわけでもなく、恨みを買うようなこともしていない。この迷子になりそうな団地にある自宅と同様に、どう見ても目立たない一家であり、私なら絶対誘拐などしない。いたずら目的ならば別だが、それならそれで弱く

て抵抗できない幼稚園児か小学校低学年を狙うだろう。幸喜君の写真を見ても賢そうな子供だ。誘拐するには手強いだろう。私の経験では、事故と考えるのが妥当だ。

しかし、どうも変だ。交通事故や水難事故などに遭遇する家族は、生活の一部が歪んでいくように、私の長年の勘が働くが、この家庭には歪みが一切ない。夫婦喧嘩も仲が良い証拠のように思えるし、どの家庭でも問題となっている教育の問題でもなさそうである。『家出』が一番しつくりくる。

「そんな馬鹿なことあるか、これは誘拐事件に間違いない」

大橋課長は、どこか喜んでみるみたいだ。本当に不謹慎なやつだ。

この日の夕方のことだった。母親の携帯電話が鳴った。幸喜君の携帯電話からの着信だ。私と父親に「幸喜から電話」と言っ、母親が出た。

「もしもし、幸喜？」

「幸喜君は僕の家にはいます。明日、送っていきます」

電話の相手が話した。

「貴方は誰？幸喜はそこにいるの？」

母親が言ったが、一方的に切れてしまった。幸喜君の携帯電話に急いで掛け直すが通じなかった。

早速、携帯電話会社へ連絡した。携帯電話は、この団地の近くの商店街から発信されたことが分かった。しかし、人出の多い夕方だったため、怪しい人物の目撃情報はなかった。

誘拐はしたが警察が動いていることを察し、身代金を諦めたのか。それとも子供の家出を手伝っただけなのか。

「電話で、〈明日、送っていきます〉ということは、家出をした幸喜君が帰りたくないというのを、今、説教しているから送るのは明日にしたいということか」

私は、このよく分からない状況を整理しようとした。

「だったら、自分の名前を名乗って、両親に迎えに来てもらおうだろう。誘拐犯が身代金を諦めたんだよ」

大橋課長が電話の向こうで言う。

「しかし、誘拐犯ならば、明日ではなく、すぐにでも帰すと思いますが。子供とはいつでも大荷物ですからね。遠い所にいれば別ですが、近くにいますよ」

私が言うと大橋課長は答えない。

本当に明日、幸喜君は帰ってくるのだろうか。幸喜君の顔を見るまでは安心できない。私は、念のため、ここに泊まることにした。

いずれにしても無事帰ってくるのだ。事故でなくて良かったと、幸喜君の両親は喜び、一件落着の様相になっていた。

## 2

### 怪物出現

世紀の大事件は、この日の夜に起こった。どのテレビ局も『ニューヨークに怪物現る』というようなタイトルを画面の右上か左上に表示して、同じ映像を何度も放送していた。身長5メートルの黒と灰色の人間型ロボットがビルを破壊している映像で、ニューヨーク市警察がピストルやライフル銃などで発砲してはいるが、まったく効いていない様子だ。

この怪物、5つのビルを破壊し、宝石店から宝石を少しばかり取っただけで、消えてしまった。まるで、無敵であることを世間に知らしめるためだけに来たようだった。確かにデモンストレーションとしては成功である。これだけの性能であれば、テロリストがこぞって購入するに違いない。

テレビでは早速ロボットの専門家が登場してロボットについて解説している。それによると、ロボットは、何を動力源にしているか分からないが、強力なパワーで、人工筋肉のようなもので動いている。驚いたことに、全身が特殊な樹脂で覆われていてピストルやライフル銃の弾が当たっても衝撃を吸収してダメージをまったく受けず、バズーカの砲弾さえも撥ね返している。しかも、ジェットエンジンもプロペラもなしに空を自由に飛び、素早い動きでロケットミサイルも避けている。専門家が言うには、現在の最先端技術を駆使しても、ここまではできないだろうという。

当のアメリカでは、国民のショックが大きく、小さな町まで大騒ぎとなった。アメリカ大統領が『国家の存亡を賭けた戦いになるかも知れない』と、早くも敵意・き出しのコメントをテレビで発表した。一方、日本では、総理大臣の会見があったが、『犯人の目的がはっきりしていないため、事実を確認して意見を述べたい』と、『対岸の火事』とばかりに、ただ見物する姿勢にしか見えない。

マスコミが『自衛隊でどこまで対応できるのか』とか、『東京に現れたらどう対応するのか』と質問を浴びせたが、何も明確な回答はなかった。

次の日、幸喜君は帰ってこなかった。電話もなかった。私も彼の両親も、何もすることもできず、幸喜君の安否を祈るだけであった。連絡がないのは、これほど辛いことなのかと、改めて思い知らされた。担当を代えてくれと大橋課長に言ったが、「佐藤さんの手を借りるほどの事件は起きていないよ」と言って担当を代えてくれなかった。幸喜君の両親が不安になるからという理由もあった。

容疑者からの電話が幸喜君の携帯電話だったため、いたずら電話でも事故でもない。

幸いなことに、マスコミは、犯人に刺激を与えたくないという私の意見を聞き入れてくれた。というより、世紀の大事件の中、こんな事件など放送するに値しないということだろう。

幸喜君が帰ったのは、それから1週間後のことだった。塾から帰宅するように帰ってきた。両親は幸喜君を抱きしめて泣いた。しかし、幸喜君は「ごめんなさい」とだけ言う。どこに誰といたのかは話してくれない。やはり、家出だったようだ。

私は1週間ぶりに署に戻り、大橋課長に報告した。

「とにかく、何事もなくて良かったですよ」

「佐藤さんの言った通り身代金目的の誘拐事件ではなかったな。ご苦労様でした。ただ、誘拐未遂ということもあるので、幸喜君が落ち着いたら、佐藤さんからうまく聞き出してほしいんだが」

大橋課長が言った。いつもの私の仕事だ。誘拐事件にならなかったのだから、そっとしておいてもいいんじゃないかとも思う。もしかしたら、近所の知り合いの家にも家出していたとか。とにかく、幸喜君に会って話を聞いてみることにした。

次の日、幸喜君の学校の帰りを狙って、校門に行き、歩きながら聞き出すことにした。人間は歩きながらだと意外といろいろなことを喋りだすものだ。私は、事件について直接聞くのを避けて、巷で一番話題になっていることから話し始めた。

「幸喜君、アメリカに現れた怪物のテレビ見た？あれ、本当に凄いね」

「怪物じゃないよ。ロボットだよ」

幸喜君が答えた。いきなりヒットである。

「ロボットはロボットだけど、ビルを破壊し、人を殺すなんて、酷いよね」

「今度現れたら、ぼくがやっつけてやる」

私は子供のヒーローごっこに付き合うつもりはないので、話題を変えた。



「10日間も家に帰らなかったけど、寂しくなかった？」

「別にい……お兄ちゃんね……」

幸喜君が言う。(お兄ちゃん!?) これは家出なのかとも思った。しかし、

「お兄ちゃんって誰のこと？」

聞いてしまった。案の定、幸喜君は喋らなくなった。

怪物出現で、世界各地で大混乱が続いていた。しかし、今のところ私には関係がなかった。

### 3

## ヒーロー出現

「お兄ちゃんを捕まえるの？」

幸喜君が悲しい顔で言う。3日目でやっと聞き出すことができた。あの日、やはり幸喜君は「お兄ちゃん」に誘拐されたのだ。もちろん、名前も住所も知らないという。

「捕まえたりしないよ。事情を聞きたいだけだよ」

「捕まえない？絶対だよ。じゃあ、お兄ちゃんを見つけてくれる?!」

幸喜君が見つけてほしいと言うので、私は驚いた。(どういうことだ?)

「お兄ちゃんのお手伝いをしないと世界が大変なことになっちゃうんだよ」

「はあ？」

私の過去の事件簿からいろいろな図式を検索しても、『犯人のお手伝いをしたい』というのは出てこない。ましてや『世界が大変なことになる』とはどういうことか。誘拐されて犯人と会話しているうちに仲間意識が芽生えたのかも知れない。普通は極度の緊張の中で芽生えるものだが、このケースは理解できない。いやな予感がした。だからといって、担当を代わることもできない。幸喜君は私を信頼しているのだ。とりあえず、お兄ちゃん探しをすることになった。

ヒントになったのは、寝泊まりしていた所から電車が見えたという彼の発言だった。電車の色を覚えていたので、本屋にあった電車の本で確認したら路線が判明した。家から車で1時間以内であることも分かった。ただ、それだけでは探し方がない。コンビニの袋かレシートくらい見えていないか尋ねると、

「何度か、スーパーに買い物に行くって、エコバッグ持ってたよ。なんか、エコバッグじゃないとお金をとられるんだって」

最近、エコバッグを持っていくとポイントが貰える店が増えている。レジ袋を減らして地球温暖化を防止するという。

「エコバッグじゃないと？あ、レジ袋が有料ということか」

レジ袋が有料なところは珍しい。早速、レジ袋有料のスーパーを調べて路線の近い所から手当たり次第に当たってみることにした。

「あ、お兄ちゃん！」

ある店で幸喜君が叫んだ。見つけたのは、探し始めてから3日目のことだった。

テレビでは連日「怪物」を報道していた。

「お父さん、怪物の名前知ってる？」と、夕食のとき、娘が聞く。もちろん興味のない私は知らない。

「プラスザーっていうんだよ。なんでも日本人が開発したらしいよ。さすが日本人だね」

（おいおい、犯罪者を称えてどうするんだこと思ったが、よくよく話を聞くとこういうことらしい。

5年ほど前、インターネットの掲示板に『Unrivaled Braszier』（日本語で『無敵のブラズザー』）という書き込みがあり、膨大な量の設計図がインターネットのあちこちのその筋のホームページにあった。ただ、ネット上の悪ふざけとしか扱われず、いつの間にか消去されたが、設計図の膨大な量と厳密さから『これは本当ではないか』ということでも少しはニュースになった。設計図には随所にサインがあり、『J. Nakamura』ということから日本人だということらしい。設計者は日本人かも知れないが、製作者も日本人とは限らない。テレビではこのようなことを報じていたという。

このネット上の「空想的産物」が「怪物」、いや「ブラズザー」に実体化したというから、ネット上でも大騒ぎになった。興味本位の個人から世界各国の政府まで競って設計図を求め始めた。もちろん、個人的には単なる興味であるが、政府関係機関では、設計図を見てブラズザーの弱点を調べる必要があったのだ。国を防衛するための文字通りの死活問題なのだ。しかし、これは容易なことではなかった。設計図は全10270頁と110のプログラムファイルから成る膨大な量だ。しかも、一部のデータはあちこちのインターネットのホームページに残っていたが、この事件後、暗号をかけ有料化し、ネットオークションで売りにも出

ていた。また、模造品まで出回り、コンピュータウイルスの格好の標的になり、これに乗じたサイバーテロも警戒しなければならなかった。

犯行声明は1週間後にあつたらしい。ニューヨークタイムズ編集部宛で、盗まれた宝石が同封してあつたので犯人からのものであることは明らかだった。声明文には『我らの唯一の神のトンガー様が、異教徒は世界を滅ぼすと言っておられる』と書かれ、アズム・ハンスーという名前が記されていた。

その後まもなく、世界各地でトンガー信教と名乗る集団がいくつもできた。信者を募るデモンストレーションが毎日のように行われている。中には過激な集団もあり、今までの行いを正すため生贄を差し出すという。

私は思った。昨日考えついたような犯行声明だ。結局は金儲けだろう。冷静に考えれば分かるはずだ。異教徒を懲らしめるために宝石を盗むものか。私なら町ひとつを完全に破壊する。そうすれば、信じたくなくても恐怖で信者になるしかない。いずれにしても、アズム・ハンスーの企みは始まったばかりだ。信者の暴走も計算しての犯行なのだろうか。

犯行声明には次回の場所と時間の予告もあつた。大胆不敵である。場所はロサンゼルス郊外。実力をさらにみせつけるといふ。アメリカ政府に対する宣戦布告だ。

あらゆる武器を準備するに違いないと、マスコミが武器の専門家を呼び解説と予想の特別番組をテレビで放送した。実に詳しい。私が敵だったらビデオ録画して研究するような内容だ。

「原子爆弾でも使わなければ倒せないかもな」

私が言うと、娘は、

「じゃあ、犠牲者がたくさん出るじゃない。アメリカでしょ、きっと大丈夫よ。だって30年以上も前に月に行った国なんだから」

しかし、冷戦時代が終わったため、内戦や紛争に対応する武器は発達したが、大国相手の武器はというと原爆や毒ガスのような大量破壊兵器しかないのである。もともと、ミサイルが効かないというのは想定外であろう。

「ねえ、お父さん、どうしてアメリカなのかなあ」

宣戦布告する相手がなぜアメリカなのかと問う。

「それはいい質問だね。やはり無敵という自信がアメリカを選んだんだろうね。防御力と攻撃力の両方で絶対の自信があるんだろう。アメリカに勝てれば、世界中のすべての国に勝ったようなものだからね」

ブラスザーは、場所も時間も予告通りに現れた。しかも、今回は鮮やかな赤い体に白のラインが入り、貴公子のようにきめている。前回の黒と灰色の暗いイメージが気に入らなかったのだろう。今回は、まるでスーパースター気取りだ。

この様子は全世界に放送された。史上最高の視聴率だろう。私もテレビを食い入るように見ていた。

「あのバズーカ砲が当たれば破壊できるな。装甲板のぶ厚いドイツ戦車を玉砕したんだからな」

私はそう言いながらも、70年前の武器が通用するものかと考えた。案の定、当たってもびくともしない。それどころかロケット弾を投げ返してくる。なんという速さだ。

「マイコンチップにより人間が直接操作しなくても、簡単に弾をかわすことも反撃もできるらしいよ」

娘が説明する。

「詳しいんだな」

「学校の友達の方が詳しいよ。皆、話題といたらこればかり、いやでも覚えちゃう」

娘がうんざりした感じで言う。私が子供の頃は、テレビアニメのヒーローの必殺技をよく友達と競って覚えたものだ。今は、報道で悪者扱いでも子供にとっては興味の最大の対象なのだ。

「お父さん、あのブラズザーね。強力なレーザーなら効くんだった」

息子が今か今かとレーザー砲の出番を待っていた。しかし、これが一番お粗末だった。世界最大級のレーザー砲といっても1基しかなく、隠れていたところを発見され、発射する前に破壊された。武器の詳細まで報道してしまうマスコミが悪いと、私は思った。

「あーあ、駄目だよ。たぶん、照準にレーザーを使っちゃったんだね」

息子が難しいことを言う。それは、レーダーから発射されたマイクロ波をブラズザーのセンサーによって感知され、その発射位置が分かるらしい。こんな子供までもが武器の評論家になるような事件は、早く終わってもらいたいものだ。

やがて、ヘリコプターが出てきて、ジェット戦闘機が出てきて、さながら映画の「キングコング」のような光景になってきた。キングコングは攻撃しなかったが、ブラズザーは背中にある大きなライフル銃で攻撃してくる。このライフル銃だが、鋼鉄製の弾を強力な電磁石で超高速に加速するとテレビで解説していた。確かに通常のライフル銃とは桁違いの破壊力



がある。ジェット戦闘機はあつという間にやられ、装甲板の厚い戦車もひとたまりもなかった。好き放題に暴れている。テレビには時折トンガー信者の集団が映し出された。彼らは手と手を取り合って喜んでいる。信者になったばかりという人も多いはずである。本当に喜んでいるのだろうか。気持ちが理解できない。

「凄いね。宣戦布告するだけのことはあるわね」

娘が言う。『なに感心してんだ！』と、娘を叱ろうと思ったが、事実だからしょうがない。

「こんなとき正義の味方、スーパーマンかなんかが現れるんだよな」

私は冗談のように言った。しかし、冗談ではなく、神様に祈る気持ちだった。このままアメリカが負ければ、世界中の人がトンガー様の信者になり、これからの生活が一変するのだ。私の人生はもうそう長くはないが、これから長い人生を送らなくてはいけない子供たちが、トンガー信者に支配された世界に生きるのは不憫である。まして、娘が生贄にされるかも知れないと思うと、何のどの神様でもいい、信者であってもなくても分け隔てなく平和を与えてくれる神様に祈るばかりである。

そのとき、冗談ではなく、それは現実起こった。青い体に白いラインのブラズザーが現れたのだ。といっても、一瞬の出来事でテレビから目を離れた瞬間に赤のブラズザーが動か

なくなっていたので、何が起きたのかその瞬間は分からなかった。後のスローVTRで分かったのだ。

「青のブラスザー、かつこいいね。お父さん、凄いいね」

息子が目をキラキラさせて言う。世界中の誰もがそう思ったに違いない。

赤のブラスザーは死んだ。破壊されたわけではなく、中で操縦していた人間が心臓を刺されて死んだのだ。青のブラスザーのお陰でアメリカ側が勝利し、第2回目のデモンストレーションは失敗に終わった。

次の日、赤のブラスザーの解体をするはずであったが、ハッチを開けて間もなく大爆発を起こし、研究所と一緒に、粉々になってしまった。よって、身元を調べることも不可能になってしまった。

アズム・ハンスーよりニューヨークタイムズ編集部に封書が届いた。『トンガー様が怒っておられる。我々の力を甘く見ると後悔することになる』とあった。これで終わりではなく、これからが本番だという宣言に読めるが、負けた者の強がりとみるジャーナリストが多かった。

テレビの報道番組では2体のブラスザーのビデオ分析を連日報じていた。当然、ヒーローは青のブラスザーである。あの日、青のブラスザーは赤のブラスザーにマッハ1・5の速度で近づき、目の前で急停止した直後に剣を胸に刺したという。弾丸などの衝撃には強いが比較的ゆっくり動くものには弱かったらしい。つまり、弱点を知る者＝開発者ということになると、マスコミはヒーローの名前は、J. Nakamuraではないかと予想していた。

## 4

### ヒーローとの出会い

私は、「お兄ちゃん」を追いかけた。定年近い私には無理かと思っただが、体力のないやつだ。あつという間に追いついた。手をつかんで足をかけて倒し、後ろ手にした。手錠をかけた。ようとしたが、止めた。幸喜君が追いついて来たのだ。

「誘拐犯で捕まえたいが、あいにく事件が事件じゃなくなってしまっただけでも聞かせてくれないか」

私は、署に連れていきかけたが、幸喜君と約束した通り、お兄ちゃんの家に行って事情を聞くことにした。弱々しく、汚い服装だったので、路上生活者と思われ、逃亡や危害を加える危険もなさそうだった。

「お兄ちゃん」の名前は中村忠史、30歳。住んでいる所は、昔、自動車修理をやっていたという廃墟工場のような家だった。

その家に入るなり、幸喜君が騒いだ。

「おじさん、こつち、こつち！」

幸喜君が私の手を引いて、廃車同然の車の下を指差す。

「ここは絶対だめです」

中村が弱々しく抵抗するが、私が睨むと渋々、その車を移動した。するとそこには、地下室への入り口があった。地下に降りていくと、10畳くらいの部屋にパソコンや見たこともない機械がたくさんあった。さらに地下への階段があり、降りていく。

「おじさん、これ見て！」

幸喜君が水銀灯のスイッチを入れた。

「おじさん、ね、凄いでしょ」

地下の少し広い空間に水銀灯が灯る。徐々に明るくなると、それが何か分かった。それは青のブラスザーだった。

振り返ると、私の目の前に、世界のヒーローJ.Nakamuraがいたのだ。

私は、恐る恐る中村に聞いた。

「君のインシヤルはゴネだよな。ブラスザーの設計者は」ゴネではなかったか。別人だろ」

「ペンネームです。親友の熊田譲二と合わせてジョージ・ナカムラとしました」

「正しくは、ジョージ&ナカムラってことか。ペンネームねえ」

私はもう一度青のブラスザーを見た。水銀灯が明るさを増すと、よく見えた。薄汚れているところが妙にリアルだ。体はテレビ画面では鮮やかなスカイブルーだったが、実物は暗い青色だった。

私は、この場所から逃げ出したかった。今、世界を騒がしているものが、ここにあるのだ。

世界のヒーローがここにいるのだ。私は、悪から世界を救ってくれたヒーローをロサンゼルスでの殺人容疑で逮捕するというのか。そんなことをしたら、私の生活はこれからどうなるのか。悪魔だとか非国民だとか非難されるのか。定年まで平々凡々と過ごしたいのに。

私が無言になったので、中村は語り始めた。